

教養としてのスポーツ授業

千葉大学の2事例

大西 好宣

1、イントロダクション及び発表の背景

発表者は比較高等教育を専門とし、近年は留学(生)政策を中心に論考を発表している。2011年に大阪大学で教員となってからは、現在の勤務先である千葉大学を含め、学位の基盤となった狭い専門(=高等教育)には必ずしも拘らず、より広い視野からいわゆる教養教育に携わるようになった。

他方、発表者はラグビーを中心とするスポーツの愛好家でもあり、2016年からは千葉大学体育会ラグビー部の顧問も務めている。さらに、一人の研究者として日本ラグビー学会に所属し、これまでにラグビーを対象とした数編の論考や翻訳を発表している。教養教育に携わり、スポーツを愛好する発表者自身の中では、教養とスポーツという二つのキーワードが自然に並列して存在していたが、ある時、現代社会で大きな存在を占めるこのスポーツという分野が、教養として扱われる実態が(前任校でも、現在勤務する千葉大学でも)見られないのは如何なる理由だろうかとの疑問がわいた。

初等・中等教育における筆者自身の経験でも、体育の時間は専らスポーツを实践(プレー)することに大半が割かれ、保健の授業はいわゆる生理学を中心とした座学が主であった。各種目の歴史や発展、さらにはゲームの観戦や応援に関する文化的な側面について、正規の授業で学んだ日本人がどれほどいるだろう。古くは自由七科と呼ばれた時代から、リベラルアーツの一つであった音楽を例に取れば、初等・中等教育の段階でさえ、実践(楽器演奏や歌唱、リズム取りなど)に加え、古典音楽の歴史やそれらが生まれた背景、作曲家の生涯、さらには和音の技法や交響曲、オーケストラの構成などの理論的な側面まで、幅広い教養が語られるのはまるで様相が異なる。これはなぜなのだろうか。

2、発表の目的

上記のような問題意識から、発表者は2018年秋、勤務する千葉大学で人文社会学的な見地から**教養としてのスポーツ**を講じる試みを構想し始めた。その結果、2019年、わが国におけるラグビーW杯開催を契機として「ラグビーを知る」を、さらにその翌年には「グローバル社会とスポーツ」という二つの授業が実現することとなった。本発表ではこの二つの授業の実践事例を報告し、学会参加者の中から多くの賛同や共感を得ることで、他の大学にも同様の事例が生まれることを期待するものである。

3、スポーツと教養：千葉大学における二つの授業実践

(1)「ラグビーを知る」(普遍教育、全学・選択授業、1単位)の概要

2018年秋頃、筆者が最初に構想したのはラグビーを主体とした授業案であった。ラグビーを選んだのは、数あるスポーツの中で自身に3年強の選手経験と約40年という長いファン・観戦歴があり、研究者としても一定の業績があることが大きな理由である。また、タイミングとしても翌2019年秋にW杯が日本で初めて開催されることで、いずれこのスポーツが注目されるであろうと予測し、今始めるのがベストだとの自信があった。

千葉大学の授業は90分1コマを基本とし、週1回×8週間計7.5コマで1単位を付与する。毎年1~4名のゲスト講師を招くのがこれまでの恒例となっており、その顔ぶれは、タイで国際協力としてのラグビー指導を行う元日本代表選手、老舗のラグビー雑誌編集長、2021年東京オリンピックの女子7人制日本代表監督、ラグビーの国際統括機関WR(World Rugby)関係者でタグ・ラグビーの創始者などで、実に錚々たる面々が協力してくれている。

他方、受講者数の点では、教室の収容人員という物理的な制約があった開講初年(2019)度の79名(一般市民4名を含む)に比べ、オンライン授業となった翌2020年度には186名とより多くの希望者を受け入れることが出来るようになった。コロナ感染の拡大という負の環境による結果であるから素直には喜べないものの、2019年W杯後に高まった若者のラグビーへの関心を確実に反映してもいるだろう。

(2)「ラグビーを知る」の授業内容

各回の授業内容は、ラグビーの歴史に始まり、オリンピックやW杯との関連、世界のラグビー、日本ラグビーの現状と課題、ラグビーと大学、ラグビーとメディアなど、コロナ感染拡大の前後でほぼ不変である。例えば、ラグビーの歴史の回ではその冒頭、ラグビーがサッカーから生まれたというのは単なる俗説であり、サッカーの試合中にエリス少年が初めて手を使ってプレーしたことがラグビーの誕生であるというのも、当時のfootball=

サッカーという誤解から生まれた神話に過ぎないという話をする。半数以上の受講生がこうした俗説を当たり前のように信じているので、毎年顔ぶれは変わっても、学生の間には新鮮な驚きがあるようだ。

2019年度から2021年度までの3年間、受講生に対する主要な課題は「日本ラグビーの具体的な振興策」についての個人別最終レポートとした。すると案の定、毎年同じ問いには似たような回答が返って来た。いわく、プロ化の促進、メディアへのアピール、サッカーJリーグと同様の地域密着化、初等教育段階でのラグビーの普及などである。当初2年分の概要は既に大西（2021）として発表したの、関心のある方は是非参照されたい。

実はその間、プロ化や地域密着、メディアへの露出増は現実のものとなっている。2022年1月、それまでのトップリーグを解消し、新たな社会人ラグビー・リーグであるリーグワンが誕生したのである。これに伴い、2022年度からは課題を変更した。具体的には、後述する別の授業「グローバル社会とスポーツ」における実践の一部を取り入れ、個人ではなく5～6人程度のグループ研究課題を基本とし、テーマも「千葉大学における女子ラグビー部の誕生は現実的かどうか」というより身近な題材にしたのである。受講者が増えすぎたため、個人でのレポートを添削し個別のコメントを書き込む時間が取れなくなったという現実もある。

(3)「グローバル社会とスポーツ」(普遍教育、工・看護学部選択必修授業、1単位)の概要

上記授業が、発表者によるあくまで個人的な思惑から誕生したものであるのとは対照的に、以下に述べる「グローバル社会とスポーツ」は主として大学側の要請によって誕生した。その背景には、1) スポーツを題材とした人文社会科学的な指向を持つ授業が千葉大にはなかったこと、そして、2) ラグビーに関する上記授業の受講者数が増えていたこと、という二つの大きな理由がある。2019年秋に届いた、次年度授業に関する大学からの要請は、「ラグビーを知る」と一部重複しても構わないので、同様の授業方法論を堅持すると共に、対象をスポーツ全般に広げてほしいというものであった。なお、当該授業は上記「ラグビーを知る」とは異なり必修科目であるため、ゲスト講師の招聘は認められていない。毎年の受講生数がコロナ前も後も約80～100名と安定しているのも、必修授業であることの特徴である。

(4)「グローバル社会とスポーツ」の授業内容

ラグビーという単一種目しか扱わない授業「ラグビーを知る」とは異なり、「グローバル社会とスポーツ」で扱うスポーツ種目には球技、格闘技、体操、eスポーツなどに至るまで一切の制限がない。そこで、発表者は当初からより根源的な問い、すなわち、スポーツとは何か、スポーツの応援とはどうあるべきか、スポーツにおけるフェアプレーとは何か、スポーツマンシップとはどういうことか、などに絞って講義を組み立てることとした。と言っても、細かな事項の暗記によるペーパーテストを実施して、知識の定着度合いを測るといった評価手法は、この授業に限っては余り意味がないと考えた。その点は「ラグビーを知る」も同様である。

初(2020)年度のみ、深く考えもせず「ラグビーを知る」と同様に個人レポートを複数回課したが、当該授業で経験済みの個別レポートのコメント付き採点と返却という作業がさらに100名分増え、徒に失敗を繰り返すことになった。大きな反省点である。

そこで考えたのが、5～6人一組のグループによる課題研究という評価手法である。2021年度を受講生には、前年度と異なり次のような課題を出した。

- ・テーマは特定種目、或いはスポーツ界全体に関わるものなど、スポーツに関する研究なら何でも自由に設定可
- ・但し、何らかの国際的な要素を含んでいること
- ・パワーポイントを用いて、15分のプレゼンテーションを行い録画して授業最終日前日までに提出すること
- ・授業最終日は自グループ以外の発表を最低5件視聴し、各々審査すること

結果として、軟式テニスや剣道など、授業では必ずしも十分に扱えなかったスポーツ種目に関する多くの興味深い研究が提出された(巻末の表1)。ここで判明したのは、分野を狭く絞れば、経験や知識のある学生の方が教員よりむしろ格段に詳しい、という当たり前の事実である。実際、発表者自身も実に多くのことを学んでいる。まさに、福沢諭吉の言う「半学半教」を地で行く経験であるといえよう。

また、受講生たちにとっても、仲間の研究発表を視聴することで、さらに豊かな知識を得ることに繋がっていることは間違いない。例えば、この授業では翌2022年度を受講生に、前年度を受講生による優れた研究発表上位3件を視聴して貰っている。その結果、2022年度の研究の方が総じて質の高いものが多くなっているように思う。一例を挙げれば、バドミントンのガットの張り具合について、アジア系の選手と欧米系の選手とを比較した研究がある。この研究では、スマートフォンのアプリを用いて、シャトルを打った時の音程を何十例も測定するとい

う科学的なビデオ解析の手法が用いられている。学会発表並みの質の高い研究であり、多くの受講生が刺激を受けたと回答した。単独の教員による独りよがりな授業では、決して得られなかった果実だと断言出来る。

4、まとめ

上の二つの授業では、発表者の専門である高等教育を切り口に、大学とスポーツ、或いは学生スポーツとフェアプレーなどと題した講義も行うものの、それ以外にも例えば研究とは何か、高校までの勉強とはどう違うのかといったような、研究者としての根本を教えたりもする。また、発表者は国際協力の実務家としての経歴も長いので、国際協力とスポーツという話をしたこともある。つまり、どのような専門であれ、スポーツを題材とした教養教育を行うことは可能ではないだろうか。例えば、英語教育が専門であれば、スポーツを題材とした英語の文献を取り入れれば良い。政治学が専門ならスポーツとオリンピック、心理学が専門ならスポーツと心理学などのコンセプトが考えられよう。多くの賛同を得たい。

表1 2021年度に受講生から提出された研究タイトル一覧

グループ	研究タイトル
1	サッカーと人種差別
2	アメフトとラグビーの人気の差を探る
3	日本のプロバスケットボール競技シーンに白人選手が少ない理由
4	世界的なスポーツになるための条件とは
5	スポーツ選手の発信力
6	コロナ禍後のスポーツの国際的問題の解決法
7	NBAの国際化はなぜ進んだのか
8	マサイ族がバレーボールをしてみたら
9	ホームランパフォーマンスについて
10	eスポーツの種目別の強豪国はどこか
11	女子野球の国際化について
12	卓球界における中国一強についての選手育成の歴史からの考察
13	日本のサッカーと世界のfootball
14	スポーツと地域
15	スポーツの中心を日本に
16	ヨーロッパでテニスが発展している理由
17	総合格闘技における地域別身体的能力や体格差
18	日本と海外のテレインの違いと求められる技術の相違について
19	陸上競技・駅伝における道具の与えた影響
20	日本、韓国、世界のeスポーツの文化発展について

引用文献

大西好宣 (2021) 「大学生が考える日本ラグビーの振興策：W杯日本大会開催前後の比較を通して」『ラグビーフォーラム』(14) 41-47.